

一寸手で味をみるとどうやら酒のようです。こんな山奥に誰が酒をつくっているのかふしぎでたまりません。キツネのしわざかなと思ったがそうでもありません。酒好きの作兵衛は飲む程に酔って眠ってしまいました。夜中に眼をさしましたがこんな時はじっとしていることだと思つて朝になるのを待ちました。そのうち東の空が明るくなったので東に向つて歩き出しました。朝は酒は飲みません。

家に帰つてその話をすると隣の金作がそれはサル酒だ。これから行つて全部持つてこようといいました。作兵衛は行きたくなかつたがウソつきと思われれると思つて二人で山に入りました。二人はどんだん山に入りましたが、サル酒の所へは行けません。作兵衛は金作じいさんに何回もあやまったが心の中ではこれでいいんだ。サルだつて苦労してつくつた酒なんだ。あの話はおれ一人の喜びでいいんだと。

